

『勸進能舞台桜』注釈(三)

時代物浮世草子研究会

(木越 治・高島 要

・高橋明彦・村戸弥生

・木越秀子・穴倉玉日)

【凡例】

- 一 本稿は延享三年正月八文字屋刊行の浮世草子『勸進能舞台桜』(かんじんのうふたいざくら)(全五卷)の注釈である。今回は第三巻を扱う。
- 二 底本は長谷川強他編『八文字屋全集 第十八巻』(汲古書院、一九九七年刊)に拠った。詳細な書誌情報等はすべてこちらを参照されたい。
- 三 本注釈に掲げる校訂本文の作成方針は以下のとおりである。
 - 1 漢字は可能な限り現行の字体に直す。
 - 2 底本の句読点はすべて「。」で区切られているが、適宜「、」「。」「」を区別する。
 - 3 底本にない箇所でも、意味を取りやすいと思われる場合には、適宜「、」「。」「・」「」濁点等を補う。
 - 4 人物の発言や心中思惟の部分には「」を付す。
 - 5 底本のルビはすべて生かすが、それ以外にもあった方が読みやすいと思われる箇所には適宜補う。

6 助詞の「共」、形式名詞の「事」等は原則として仮名に開く。

7 全体として、日本古典文学を学ぶ海外からの留学生が、本文を読むことに関して抵抗を感じないような本文づくりをめざした。

四 注釈は簡潔をむねとし、できるだけ近い時代・近いジャンルの用例を掲げるように努めた。

五 用例本文は通行の字体を基本とし、ルビは必要と思われるもののみ（ ）に入れて掲げた。

六 用例の出典表示は、「近松・宵庚申」「秋成・妾形気」など作者名を掲げるもの、「咄本・喜美賀楽寿（安永六年刊）」のようにジャンルと刊年を示すものなど一定していないが、あえて統一することはしていない。

七 各章の冒頭に、梗概を掲げた。

八 礎稿作成者は以下の通りである。

三の一 木越 治

三の二 木越秀子

三の三 穴倉玉日

勸進能舞台桜

三之巻

目 録

【校訂本文】

ゆや 狂言 宗論

第一

四条五条の芝居のうつし

大夫が蔵人をふるは涙の袂

実道理なりあはれなる棧敷

第二

村雨がして大夫をちらし候

又もや御意のかはつた趣向

たゞこのまゝにいとまとはおしや命

第三

南無あみだぶの武士の娘

浄土方は四十八まきしてかゝれば

法花宗は経かたびらでの仕合

◆ゆや 卷二の下敷になっているのは、能の「熊野（ゆや）」と狂言の「宗論」である。「熊野」は三番目物。作者は諸資料に世阿弥作とあるものの確実とはいえないようである。梗概は以下のとおり。平宗盛（ワキ）は、遠江の国池田の宿の長熊野を寵愛し、都に留めおいている。そこへ池田の宿より重い病に臥している熊野の母から娘の帰国を促す手紙が届く。熊野は宗盛に暇乞いをするが許されず、かえって宗盛の花見に同道させられる。物見車に宗盛と同乗して清水寺に着いた熊野は、観音に母の無事を祈り、また酒宴の席で宗盛の求めに応じて舞う。折しも村雨に花が散る有様を見て熊野の詠じた「いかにせむ都の春も惜しけれど馴れしあづまの花や散るらむ」の歌に感動した宗盛は帰国を許す。熊野は喜んで直ちに東路につく。

◆宗論 出家座頭狂言。身延山から下向する本国寺の法華僧と善光寺から下向する黒谷の浄土僧（シテ）とが道連れになる。法華僧は相手が浄土僧と知って逃げようするが、浄土僧はつきまとって宿も相部屋となる。宿で二人は宗論をするが、お互いにあきれて寝てしまう。後夜に起きて踊り念仏・踊り題目と名号を取り違え、浄土も法華も同じと謡って舞い納めるという内容。二人が法文を誤って説く珍妙な宗論を核として形成されたものであるが、宗論は室町時代を通じて行われ、特に法華対浄土の宗論は激しかったらしく、その流行を背景として構想されたものとみられる。浄土宗の柔と法華の剛の対照の妙を言葉・しぐさの両方の面から見せている。

◆四条五条の芝居 「四条五条の橋の上」（熊野）による。京都の芝居小屋は江戸中期から現在に至るまで四条にあるが、もとは五条などにもあったらしい。「芝居」は四条鴨川の東にあり。……出雲のお国……北野の森・祇園の南林あるひは五条河原橋の南にて興行しけるに、秀吉公伏見城より上洛し給ふ時、見物群集し妨げに及ぶ。故に四条の河原にうつす。……遂に寛文年中に今の地にうつして常芝居となる」（『都名所図会・二』）

◆うつし 模写・模造したもの。書状や文書のように書写して作るもの。

のに限らず、いろいろなものに用いる。「をんあるじでうすにんげんをおん *punk* につくりたまふ」（『目ボ』）

◆ふる 遊女が客を嫌って、意に従わないのをいう。「ふる ふり心なり、我すかぬ男にあひて、気のふるといふ儀なり」（『色道大鏡・一』）

◆涙の袂 涙に濡れた袂。「最眞目（ひいきめ）にさへ持つ涙もれて袂を濡らし」（『浄瑠璃・八百屋お七・中』）

◆実道理なりあはれなる 「げに道理なりあはれなり」（『熊野』）による。

◆村雨がして大夫をちらし候 「村雨のして花を散らし候ふ」（『熊野』）による。「村雨」は、ひとしきりざつと降る雨。

◆又もや御意のかはった 「またもや御意の変はるべき」（『熊野』）による。「御意」はお考え。おぼしめし。「又もや御意のかはるべき。はや御立ちとすゝめける」（『近松・傾城反魂香・上』）

◆南無あみだぶ 「南無阿弥陀仏」を「南無あみだぶ」と唱えることは現在でも行なわれている。「婆さまは数珠つまぐつて送り出、なむあみだぶなむあみだぶ」（『咄本・慶山新製曲雑話（寛政十二年刊）』）

◆四十八まき 無量寿経に説く阿弥陀如来の四十八の大願のこと。浄土宗の根本となる教え。

◆法花宗 日蓮宗のこと。

◆経かたびら 死者を葬るとき、着せる衣。麻衣に真言陀羅尼などを書く。「愚按するに以上三経（『大宝楼閣経ナド』）の本説に拠れば、経衣（かたひら）には隋求宝篋等の陀羅尼、光明真言等を可書、何となれば、真言陀羅尼は、不思議法性の声字なるが故に、一字に無量無辺の義理法門を具し、一句に万法一切を含す」（『真俗仏事編・四』）

◆仕合 技などを競うこと。「其日の八つ時分に、新平かたへ状をつけ、今晚、椿原にて仕合（しあひ）致すべきよし、いひやりて」（『西鶴・武道伝来記・三・三』）

○卷三之一

○四条五条の芝居のうつし

【梗概】

有馬田山が大夫吉野を自邸に引き取ったのは、下心があつてのことであるが、吉野はなかなか言うことを聞かない。それは、都を恋しく思うためだろうと、彼女を慰めるために芝居を催させる。加古川右近が座元になり、敵役は筋間三郎左衛門がつとめる。外題は「今業平牛飼車」。その総稽古の見物に田山が吉野とともに出かけていくと、その見物人の中に田山の倅藏人とその御供の生田新三郎がいる。新三郎と藏人が若い吉野に狂っている田山の様子をさかんにからかうので田山は恥ずかしくなる。その結果、藏人の「私が拝領いたします」という言葉に抗うことができなくなり、吉野は藏人に引き取られることになる。奥の部屋に連れられてきた吉野は、藏人から、友仲がいなくなったのだから、この国は自分のもの同然、だから、自分のものになれとさかんに迫られるが、吉野は友仲との再会を願うばかりである。

【校訂本文】

「これは有馬の田山なり。

さても都一文字屋の大夫をば吉野と申し候ふ。ひさしく屋敷に留め置きて候ふが、さまぐにくどけども心にまかせず候へども、もして都恋しさのあまりにやと存じ、芝居を申し付け慰ばやとおもひ候ふ」。

「いかに誰か有る」

とよび出せば、加古川右近まかり出て、

「太夫どの御慰として芝居興行のよし。京大坂へも申しつかはし、女がたばかり五六人はよびよせて候へども、立役その外は御知行の百姓の内よ

り、器用なるものばかりえらび出し相つとめさせます。すなはち、饒間三郎左衛門も病氣本復致せしに付きて、敵役をつとめ申すべきとの義。狂言の趣向はすなはち三郎左衛門が皿をわりし腰元を、殺せし所をたていれ、惣外題は今業平牛飼車三番つゞき、井に大尽の鼻毛は長岡の通路、附たり大夫が花の流れ河は音羽の山ざくら、と申す狂言を取りくみ、今晚らうそくたてゝの惣芸古」

と申せば、

「コリヤよからふ。その惣げいこから見ん」

と、あたらしくたてさせし檜木舞台、縁くによりて見物群集すれば、円山入道は吉野をいざなひ、西の三げんめより十けんめ迄、棧敷に錦をかけさせ、残る棧敷も惣家中へわりつけ、花をかざりし中にも、古入道が今をさかりの大夫と居ならびしは、不動の像に観音も同座あるかと見へにける。

「東西く、さて高ふは御座りますれども、これよりつらりとお断申し上げます。まづ以ていづれも様、早朝より御出下され」

といへば、頭取が袖をひかへて

「昼の芝居かなんぞの様に。宵よりいはつしやれ」

といへば、

「いかにも早宵より御出で下されまして、大夫本は申すにおよびませず、惣座中何程か恭ふ存じ奉ります。惣座中の代僧といたしまして、是より御礼を申しまする」

と、百姓が役にさゝれての口上片言まじりも一興となりて、くはちくくと幕をされば、だんじり六法のしやぎりをふかせ、来序の太鼓さみせんのにせて小姓役の者ども、大ふり袖に花かごを揃へ、丹前ふつて出づるは廿六七なる立役者。村雨にさくら花のちりかゝる気色を五色にぬはせし羽織はかま、幕あげさせて出たるすがた、あつはれきよき男ぶり。かげはかつらの橋柱、たてものところそ見へにける。立出て峰の雲花やあらぬ初ざくらの祇園町の風でなしと。棧敷をはるかにながむれば、大尽擁護の機げんとりども、

「ヨイヤやつちや」

とほむる内にも、円山は

「あれは悴蔵人ならずや。有馬よりはいつ帰りし」

と、稻荷山の薄紅葉ほど酒にてりし顔色も、あをかりし葉の秋れはて

「大夫とならんであふては」

と、にはかにさます興かく堂、まづ盃のめぐる事もしばしの内はくるまどめ。

「こゝよりは座敷へ」

と棧敷のはしごをそろくと、おりめの衣はりまがた

「しかまゝ」と呼るれば、

「しかま三郎左衛門是にあり」

と、追付舞台へ出る衣裳のまゝ棧敷の後へ来るをまねき、

「あれは悴蔵人ならずや」

といふ内、見物の中よりほうかぶりせし男、扇かざしてぬつと出、狂言のかたへはむかず、円山がさじきに向ひ、

「暫く、さじきの御隠居太尽さまをちくとんばかりほめ申さう」

と、すこしなまりをくはせて、

「おとしは大かた六十へわかげにかへるはなげぬき南方、たはけも見及びし年にこそよれ。しわにこそよりかゝつてそゝなかし、そゝなかせばうきぐものうかべる栄花をたのしむ事、清水寺の鐘の声。所行無常のこゑやらん。盛者必衰の下戸なりしが、色ゆへめつきり上戸となる。仏も本はぼんさまの、なかばは雲に上を見ぬ、鷲鷹と慾つよく、流水によつて香ひをかぎ、雲をへだてゝ風聞はやし。若旦那の御供して生田新三郎が是まで参りし。ヤツチヤお棧敷の大尽さま」

とほめたてしは、円山が家の古きおとな。

「蔵人に付て有馬につかはせしが」

と仰天するうち、丹前の立役と共に、くだんのほめ詞の男打つれ、さん敷の下へ来り、

「今日有馬まかり帰り国境までまいりたれば、にはかの芝居ありとの義。すぐに樂屋へ仕かけ、おなぐさみにとぞんじ、最前よりの出端、おめに懸ましてござる。私がかやうに孝行なれば。おまへには又わたくしが帰りたらば慰みものにとおぼしめして、それなる美女を召かへをかせ給ひ、草木は雨露のめぐみ、養ひ得ては花の父母たりと申すが、花をさかせて置てのおまちかけ、有がたき仕合」

といへば、さしもの円山もいやといはれず、

「何とやらんこの春は年ふりまさる朽木桜。心ばかりの寝間の伽」

と、顔打あかめて申さるれば、蔵人はかぶりをふり

「御言葉をかへせばおそれなれども、花は春あらば今にかぎるべからず。是はあだなる玉の皿の御せんぎもくらしときく。はやく奥へ入せ給へ。父の慈悲なるこの女中は私拝領仕り、ともに心を慰さん」

と、

「さげ重こへよせよ」

とて、

「是も思ひの棧敷の内、はやお帰り」

とすゝむれど、心はさきにゆきかぬる。足弱車のちからなげに

「せめてそなたのなつかしや」

と、うちながめくぜひなく棧敷をおりらるれば、蔵人・新三郎棧敷へあがり、

「コレ大夫、先年中道寺の町の口、老若男女貴賤都鄙いろめく花衣、袖をつらねてぞめきし最中、貴様に行ちがふて、名にあふ都の大夫かなと思ひ付しかども、友仲あひ方と聞、とても身にあふてくれまいと、それより郭はいふにをよばす、祇園縄手北野まで似た女郎もやとさがせども、かけをうつすほどのおもかげ老人もなきに困り、野郎になりともと、それより毎日河原おもての芝居を見れども、よつてつく器量見へず。有馬へ湯治とて出かけしも、そもじに似たる女おほくの浴人の内にあらばとかうあせるに、天のあたへと、げにやおもひ内にあれば色外にあらはる」と、しなだれければ、つきとばすを、新三郎きつはまはし、

「友仲殿国遠めされたれば、この一国は藏人様の物ならずや。いやといはるれば命がなひが」とおどしかゝれば、吉野は返事もないじやくり、

「この様に立かはりいれかはり、くどかるゝ身のせつなさ。友仲様にあふ事も」

なみだにむせぶばかりなり。右近は樂屋よりのぞき居て、

「藏人殿は円山どのとは格別の様におもひしに、山外に山あつて山つきず。家中に悪人多して極りなし」

とあきれはつれば、藏人は余念なく、

「いやでもおうでもかなへてもらはねばならぬ」

と、ひざをまくらはなうた。

「あたいやらしひ」

と、吉野が心は友仲様にあひたいばかり。人樂み人愁ふ、是皆世上の有様なり。

◇一文字屋 京都島原柳町中之町にあつた大きな遊女屋、一文字屋梅村七郎兵衛。『色道大鏡・三』には「梅村七郎兵衛」の名で見える。「風義は一文字屋の金太夫に見ますべし」〔西鶴・好色一代男・六・六〕

◇申し付け 改つて荘重な、あるいは格式ばった威厳を示す言い方。言いつける。命じる。

◇いかに誰か有る 「いかにたれかある」〔熊野〕

◇女がた 「女形」とも。歌舞伎の俳優の役柄の一つで、女性に扮す

るものをいう。この名称は女歌舞伎の禁止された寛永（一六二四）ごろから生じた。「おやま」ともいう。その首席に位置するものを立女形（たておやま）といい、女形はさらに、若女形・傾城方・花車方・娘形などに分派する。「此君女がたのかいさんといへ共、第一面鉢よろしからず」（役者口三味線・京二）「今は町の女皆芝居の女形（おんながた）の風を似せ、帆の丸（＝紋所）をはやらかし」（其磧・傾城禁短氣・二・四）

◆立役 歌舞伎狂言の役柄の一。また、その役柄を演じる役者。役柄の性格の分化や解体に伴って、少しずつ意味するところがずれてくる。延宝（一六七三）末、天和（一六八一）ごろに悪人方（あくにんがた）、敵役（かたきやく）が現れるが、それらに対立して活躍する善人の男主人公の役柄。また、それを演じる役者。元禄（一七八八）一七〇四期には最も重要な役柄となり、その芸質も荒事（あらごと）・和事（わごと）・実事（じつごと）などに分れ、初世市川団十郎の荒事、坂田藤十郎の実事のようにそれぞれの芸質にそれを得意とする役者が現れたが、のちには一人で数種の役柄を兼ねることが多くなっていった。「みなこんつよき立役つとめけるが、これらもむかしは若衆ならめ」（西鶴・男色大鑑・八・二）「立役といふ事は、全体女形の外は実事仕、てき役、道外まで一くるめの号なれども、自然とそのかしらにたつ故、実事仕の事のみになれり」（古今役者大全・一）

◆本復 病気が回復すること。「やかてほんふくして、かのはなをしめともかなはず」（咄本・きのふはけふの物語）

◆たていれ 「たていり」とも。「立入」「達入」などをあてる。歌舞伎の演出用語で、格闘や斬り合いや捕り物の場面での型。様式的な型から写実的な型まで、その種類はきわめて多く、細分すれば二百種にも及ぶであろう。立廻（たちまはり）、殺陣（たて）とも。「狂言の中に太刀打・立入する事、只少し立まはり斗にて、今の役者の宙返り事・水車、かりそめにも立入（たていり）する事なし」（続耳塵集）「立入（たていり）、全体たていりといふ。雨だて、泥仕合ひ、とりものなどの時、大勢入みだれしを、ついたてといふ」（増補戯場一覧・冬）

◆敵役 歌舞伎の役柄の一。もとは悪人方・悪方（いやがた）という。悪人の役。『人倫訓蒙図案・七』に「敵役みるとそのまゝにくらしく、無理な事のみいい、いかつがましき顔つきする」とあるように、元来はこわい一方の性格であったが、元禄（一六八八）一七〇四以後いろいろに性格が分れ、実悪・公家悪・色悪・実敵・平敵・半道敵など

に分れる。元禄期に名人山中平九郎が出て以後、初代中村歌右衛門・初代浅尾為十郎・初代嵐雛助・初代中村仲蔵・五代目松本幸四郎などが敵役の名優として知られている。「あつぱれ都一番のかたき役、ほうひげに長がたな（野良立役舞台大鏡）」「かたき役をきめて勝をとれば、見物衆はさてもよいぞと、その女形を誉るものなり」（あやめぐさ）「かたき役はかほであらははれ、実事師はかたちでしれるほどならばたれありて悪人をちかづくるものなし」（忠臣蔵偏狹氣論）

◆外題 歌舞伎や浄瑠璃の題。歌舞伎に使用され長唄などについても称する。おもに上方の称で、江戸では名題（なだい）と称した。上演に際しては看板に書かれることがしきたり、漢字五字か七字に作り、数に合わせるためにこじつけた読み方をしたり、作字をしたりする。「浪花の顔見世狂言の外題と東都（えど）三座の道行所作事の外題の附かた（所謂常盤津清本富本のこと）は祝ひの語を置き、或は其一座の首領（さがしら）又新参俳優（やくしや）の表徳などを組合せるを趣向とすれば」（雲錦隨筆・四）

◆今業平牛飼車三番つゞき。井二大尽の鼻毛は長岡の通路。附たり大夫が花の流れ河は音羽の山ざくら 浮世草子に『今なりひら物語』（元禄二年刊）がある。また、合巻に『今業平通面影（いまなりひらむかしのおもかげ）』（嘉永三）六刊）があり、この他業平のつく江戸期の小説・演劇作品としては、『業平赤烏帽子』（浮世草子・正徳六年刊）、『業平東下向』（脚本・宝暦八年初演）、『なりひら一代記』（古浄瑠璃）、『なり平うた念仏道行』（浄瑠璃宮古路）、『業平男今様井筒』（浄瑠璃・宝暦六年初演）、『業平河内通』（浄瑠璃・歌舞伎狂言、元禄七年）、『業平昔物語』（浄瑠璃）等がある。なお、『業平』『長岡』『音羽』は「熊野」に出る語。

◆鼻毛は長岡 「鼻毛が長い」を掛ける。「鼻毛が長い」は女の言いなりにふるまい、馬鹿にされるさま。『けしずみ』に「ながきものゝすべてけいせい買ふ人のはなけ」とある。「とかく女郎のするほどの事がおかしく見ゆるも、客の鼻毛のながいゆへなり」（好色万金丹・三・三）

◆狂言 歌舞伎狂言。芝居のこと。「今まで心中して死で狂言にいださるほどの事は、すべて上方に多しといふに」（ひとりね・下）

◆惣芸古 歌舞伎・操り芝居において、初日の前日に行う最後の稽古。歌舞伎役者は衣装をつけず、小道具も使わずに演技をつける。操り芝居では、人形遣いが平日の姿のままで人形を遣う。原則として初日どおりを演ずるが、長い台詞はこのときは省略することもある。なお、

この日から稽古を見るために棧敷が一般に開放され、見物衆が殺到したことから、この日のことを「大いれ」ともいう。芝居の場合に従って、稽古所（けいこじよ）などで、発表の前に当日同様に試みる稽古をもいう。惣湊（そうざらえ）とも。「あい手なしのひとりげいこ、やうくおぼへるじぶん、惣げいこのまへかたに、太夫本にてあい役者と立あい」（役者口三味線・京）「初日の前日おはやし浄るり打揃てけいこする。是を惣げいこといふ」（絵本戯場年中鑑・下）「本よみけいこ、惣稽古の混雑はまた後編の事」（楽屋方言・五）

◆檜木舞台 檜（ひのき）で床を張った立派な舞台。一流の大劇場。「かねてもよほすひの木ぶたいもじやうじゆし、けふこそ爰をはれの能」（近松・傾城酒吞童子）

◆棧敷 劇場の土間（どま）に対して、一段高くなった高級見物席。土間を取り巻いて三方にあり、東十五間、西十六間、向（むこう）九間計四十間が大劇場の定式であった。それぞれが上棧敷（うはさじき）、下棧敷（したさじき）と二層式になっている。「棧敷（さじき）も下も声くに暫鳴もしづまらず」（根無草前・二）

◆不動の像に観音 不動は不動明王の略。不動明王は五大明王の一。大聖威怒王ともいい、その像は、忿怒の形相をしている。観音を吉野に円山を不動明王にたとえたもの。

◆同座 「観音も同座あり」（熊野）による。同じ座席を占めること。「Doza おなじざ（同じ座敷、または、座敷の同じ場所、または、同じ席）」（日ポ）「お侍方と同座のならぬ奴（やつこ）めが」（近松・心中宵庚申・上）

◆東西／＼ 呼び声。相撲場・劇場・見世物・街頭などで、群集に向って口上を述べる者が、聴衆を静めるために発する。「トザイ、トザイ」と発声することが多い。また、「ザイ、トザイ」のようにも聞える。「東西くいづれも御しんべうにござりませ」（西鶴・難波の貞は伊勢の白粉・二）「是も御はなしのたねと存、則序に一幕御目につけ、東西東西」（咄本・新作落咄馬鹿大林（寛政十三年）・序）

◆頭取 芸能・相撲などで、全体あるいは一分野で音頭を取る有力な人。音頭取り。歌舞伎芝居での楽屋頭取（がくやとうどり）。「三良四良は今に病中しかくとなければども、夢路を行き踏はく心して仕組もうかくと定めがたく、頭取（とうどり）に断りいひて帰りますまに」（嵐無常物語・下・三）「先しなれる迄は、さのみいしやうのいらぬ役目を頼と、頭取にさゝやけば、さすが一座の頭取ほどあって、我無芸なるを心得」（役者万年曆・京）

◆つらりと 端から端まで。全部。「此浅鍋を以て朝夕の供御を調へ、上から下に至るまでつらりと進上申」（狂言・鍋八挺）「いかい御造作（さうさ）与次兵衛様、あづまさま皆様つらりとつかひ立た、お暇申と立出る」（近松・寿門松・上）「ここは」とむれ老人客つらりと居ならび」（咄本・落断笑富林（天保四年刊））

◆大夫本 芝居・興行などの責任者。実際の興行の運営に携わる者を座元というのに対し、法的に興行の全責任を持つ者をいう。主として江戸における呼称。上方では近世初期にのみ用いた。江戸では元禄（一六八八～一七〇四）以降、座元と大夫元は同一人物が兼ねたので、混用することもある。「雨の日は河原の太夫もと隙なる野郎めしつれ御見舞申もはてぬに」（西鶴俗つれづれ・四・二）「千秋楽：重年の役者又は他の芝居へ出る役者各太夫元と一札の盃事あるよし」（戯場訓蒙図彙・一）

◆惣座中 「座中」は芸人などの仲間。一座。一座全体。「釜入の段になりては、最眞の眠子の事ゆへ、惣座中の鬼の目にも涙をこぼし、鬼神は勿論、娘鬼杯は大声をあげて泣」（咄本・新撰勧進話（享和二年刊））

◆代僧 本来は代理の僧であるが、ここでは、代表くらいの意。

◆役にさゝれて 役目に指定する。屋久につかせる。「花守の役にさされてかり烏帽子」（俳諧古選・附録）

◆片言まじり 「片言」はなまりないし流暢でない言い回し。「柘榴（ざくろ）をみて、ひとりとはざくろといふ。ひとりとはじやくろといふ。あらずひ、つみにやまず。あたりのものしりにとひければ、二つながらかたことなり。にやくろといふが、ほんの事」（咄本・醒睡笑・四）「吉蔵・三助がなりあがり、銀（かね）持になり：むかしの片言（かたこと）もうさりぬ」（永代蔵・一・三）

◆くはち／＼と 拍子木を打つ音。

◆幕をきれば 「幕を切る」は物事を始めること。『新撰大阪詞大全』に「まくきる くちびらきすること」とあり、芝居の切幕（きりまく）を明けることからいう。「おぬしの計らひで幕を切りやれ」（千代始音頭瀬渡・三立目）

◆だんじり 歌舞伎の演技と音楽の一。祭の練物である「だんじり」の影響を受けて成立したもので、丹前（たんぜん）と六方（ろくほう）の一種の、大阪での称。嵐三右衛門家の家の芸で、宝永（一七〇四）ごろ三代目の演じた「だんじり六方」が有名である。また、祭礼の場面 で用いられる下座（げざ）音楽も「だんじり」という。『歌舞伎事

始・四』に「江戸にては六法を丹前といふ。其出立時々によるべし。また大坂のだんぢりは高股立を取、振いだす也」とある。「藤内五人に五ヶ国の御加増、御ほうびだんく」に、だんじりうつてはやした」

〔近松・雪女五枚羽子板・下〕

◆六法 歌舞伎の演技用語。手を大きく振り、足を大きく踏み締めることを基本とする動作。したがって「六方を振る」「六方を踏み」という。前へ進むときは、右手と右足、左手と左足のようになり、手と足と同じ側を出す。これを「なんば」という。動作の型により、飛六方・丹前六方・狐六方・片手六方・泳ぎ六方・回り六方などの名称があり、種類が多い。江戸では「丹前（たんぜん）」、大阪では「だんじり」ともいう。「跡目の六法さりととは御親父のすきうつし」〔役者大鑑・二〕「嵐三右衛門とみに死せしをきゝて六法のあれやそれやといふ間もあらし。はつあつめたうなつてしぬれは」〔狂歌かゞみやま・下〕「江戸にては六法を丹前といふ。其出立時々による成べし。また大坂のだんぢりは高股立を取振いだす也。京にては羽織着ながしざろりとして六法を、ふりいだす也。是嵐三右衛門の風也」〔歌舞妓事始・四〕

◆しやぎり 歌舞伎の下座音楽の一。開幕の直前と各幕の終りごとにはやす、形式的なもの。ただし、大切（おほぎり）の際は「打ち出し」となる。「幕をしめると直に太鼓・笛にて囃すをシヤギリといふ」〔絵本戯場年中鑑・中〕「トチヨンくくくくトきざみ拍子木にて幕引く、直に笛と太鼓のシヤギリしばらくしてうちあげると」〔鶏が啼東都暁・上〕

◆ふかせ 大きく鳴らす。

◆来序の太鼓 歌舞伎の下座音楽の一。狐の出入りや、狐の変化（へんげ）がにわかには正体を現すときに用い、また、狐にちなむ曲目・歌詞・役柄にも用いる。大小鼓・太鼓・笛を用い、「どろどろ二」を伴う。「丁稚提灯とほし、一三人は入、すこし仕出しあつて、らいじよに成ル。狐一疋飛び出る」〔契情鸚鵡石・序中入之上〕「花道両脇へ狐火（きつねび）すさまじく出る。立廻りどろくろいじよ有」〔曾我会稽山・六ツ目〕「らいじよ 狐場につかふ」〔戯場訓蒙図彙・三〕

◆大ふり袖 袖丈の長い振袖。袖の長さは時代により異なり、貞享（一六八四〜一八）のころ二尺ほど、享保（一七一六〜）期において二尺四、五寸ほど、宝暦（一七五一〜）期において三尺近い長さであったという（近世女風俗考）。「奥上臈の中にも梅垣どのと申て、都より吟味をあそばしおかせられたる、大ふり袖をください、是はく」と興をさ

ましける」〔西鶴織留・三・一〕

◆丹前 歌舞伎で歩く姿を様式化した芸態の名称。長い白柄の大小、巻羽織（まきばおり）、深編笠という扮装で、なんばんといわれる特殊な手の振り方、足の踏み方、丹前詞といわれる特殊なせりふで代表される。六方（ろくほう）と同種のものであるが、六方との相違は明確でなく、やがて六方に吸収されてゆく。「にせ若衆事古今無双、丹前のふり出し外にないなし」〔役者節用集〕

◆立役者 一座の中心となつて活躍する芝居の役者。「たてやくしや」とも。「されど立（たて）役者の意につれまいと思ふても、我しらず氣を求るゆゑ」〔滑稽本・客者評判記・中〕「大達者、立役者、本三尺といふ。紋看板に出す」〔賀久屋寿々免・二〕

◆村雨にさくら花のちりかゝる気色 「俄かに村雨のして花を散らし候ふはいかに」〔熊野〕による。

◆かつらの橋柱 「寺は桂の橋柱、立ち出でて峰の雲」〔熊野〕による。

◆たてもの 仲間うちでの中心人物。特に、歌舞伎の一座の中で中心となる幹部役者。そのうちの最高位の者を大立者（おほだてもの）という。「荻野屋の八重桐とて太夫中間の立者と。いはれし程の全盛（ぜんせい）の末もと」〔近松・姫山姥・二〕「寛永より元禄年中までの至極上手名人と呼ぶ、立者（たてもの）の分は、悉く其風体を絵図に頭はし」〔歌舞妓事始・凡例〕「若衆方の立者は若女形より高給銀也」〔芸鑑〕

◆立出て峰の雲花やあらぬ初ざくらの祇園町の風でなし 「立ち出でて峰の雲、花やあらぬ初桜の、祇園林下河原」〔熊野〕による。

◆大尽擁護 「大悲擁護の薄霞」〔熊野〕のもじり。「擁護」は仏法を守護する意の仏語で、神仏など尊く靈力あるものの加護をいう。こ

こは、お大尽の取り巻き連中のこと。

◆やつちや 人を褒めるときなどに発する掛け声。役者の芸などを褒めることばとして用いることが多い。やんや。やった。「日本一の名人（めいじん）様やつちややつちややつちやと褒（ほ）める歌より褒（ほ）めさする」〔近松・女殺油地獄・上〕

◆稻荷山の薄紅葉……あをかりし葉の秋れはて 「稻荷の山の薄もみじの、青かりし葉の秋また花の春は清水の、ただ頼め頼もしき、春も千々の花盛り」〔熊野〕による。酒で赤くなつていた円山の顔が蔵人の登場で青ざめたさま。稻荷山は伏見稻荷の背後にある山。

◆くるまどぐめ 「はや程もなくこれぞこの、車宿り 馬留め」〔熊

野」によるか。

◆にはかにさます興かく堂 興かく堂は「熊野」に「経書堂はこれかとよ」とあるのを利用して、「興をさます」をきかせたもの。「経書堂 三年坂の上にあり、真言宗なり。来迎院と号す」〔花洛名勝図会・三〕

◆おりみの衣はりまがた、しかまゝと 「ここより花車、おりみの衣播磨湯、飾磨の徒歩路」〔熊野〕による。

◆暫く 江戸の荒事（あらごと）歌舞伎の演出の一。善良な武士や女性が、悪人の公家や武士の迫害にあうとき、英雄が「しばらく」と声をかけて花道に現れ、「つらね」を言い、悪人を懲らしめる筋を荒事で演ずる。近世は原則として顔見世興行の一番目狂言の三立目（序幕）に置く慣例であった。元禄十年（一六九七）正月江戸中村座上演、初代市川団十郎自作自演の『参会名護屋』に起り、顔見世興行に定着したのは、正徳四年（一七一四）

◆ちくとんばかり ちよっとだけ。少しだけ。奴詞の一種。「売増坊主（まいすぼうず）が行力にてちくとん計朝比奈が、腕さきにて縛て見よ」〔鎌倉三代記・一〕「ちくとんばかりやつがれが、舌のまはらぬ誉ことば」〔歌舞妓年代記・二〕

◆清水寺の鐘の聲。所行無常のこゑやらん。盛者必衰の下戸なりしが。色ゆへめつきり上戸となる。仏も本はほんさまのなかばは雲に上を見ぬ。驚くまたかと愁つよく。流水によつて香ひをかぎ雲をへだてゝ風聞はやし 「清水寺の鐘の聲……諸行無常の声やらん、……生者必滅の世の慣らひ、……半ばは雲に上見えぬ、驚のお山の名を残す」「柳上に鶯飛ぶ片々たる金、花は流水に随つて香の来ること疾し、鐘は寒雲を隔てて聲の至ること遅し」〔熊野〕を利用した行文。下戸のくせに大夫吉野に狂つて酒を飲むようになった円山をからかう言葉。

◆おとな 長老・宿老の意。年輩でおもだった者。年功を経て経験があり、重きをなしている者。「家のおとなの若狭守出合て、座敷に請じ」〔咄本・醒睡笑・二〕

◆出端 歌舞伎で、重要人物が舞台へ登場してくるときの特殊な動作。登場を際立たせるための、浄瑠璃・囃子・所作などを伴うことが多い。その人物の性格、立場などや場の雰囲気を表すのに役立つ。「着おろしの長袴足もと定兼（さだめかね）、品之丞が出（で）」はのうたに人なみに頭をふつて間をあはすこそおかし」〔西鶴・好色一代男・三・三〕

◆草木は雨露のめぐみ。養ひ得ては花の父母たりと申すが 「熊野」

の「草木は雨露の恵み、養ひ得ては花の父母たり」をそのまま引用した。

◆何とやらんこの春は年ふりまさる朽木桜。心ばかりの 「なにとやらんこの春は、年古り増さる朽ち木桜、今年ばかりの花をだに、待ちもやせじ」〔熊野〕による。なお、これは、熊野の母親が病氣なので見舞つてほしいと熊野に訴えた手紙の文面。

◆寝間の伽 寝室での夜の相手。「かりそめながら御寝間（ねま）のお伽（とき）にも侍（はべり）」〔馬琴・高尾千字文〕

◆御言葉をかへせばおそれなれども、花ははるあらば今にかぎるべからず。是はあだなる玉の皿の 「おん言葉を返すは恐れなれども、花は春あらば今に限るべからず、これは徒なる玉の緒の、長き別れとなりやせん」〔熊野〕による。

◆せんぎもくらし 詮義する能力がない。判断力に欠けている。「小四郎が訴状、よつく当代をせんぎくらしと見立しな」〔近松・曾我会稽山・五〕

◆拝領 主君・貴人などから物を頂くこと。頂戴（ちやうだい）より重い語感があり、子孫に伝るほどの物を賜る場合にいう。「白河の法皇様より、拝領の物といふて出したらはめつきりと大金に成ませふ」〔南嶺・忠盛祇園桜・四・三〕

◆さげ重 提重箱。「人の見るをまかまはず、提重（さげじう）のかきにて酒吞かはし」〔西鶴・男色大鑑・五・一〕「上棧敷二軒に提重（さげじう）吸物茶弁当、行かれずしたるは、おのゝくは何とも思はれまい」〔其磧・傾城禁短氣・六・三〕「善も悪も打渾だ花見のさげ重」〔南嶺・今昔出世扇・四・一〕

◆こゝへよせよ」とて、「是も思ひの棧敷の内、はやお帰り」とすゝむれど、心はさきにゆきかぬ。足よは車のちからなげに 「牛飼ひ車寄せよとて、これも思ひの家の内、はやおん出でと勧むれど、心は先に行きかぬる、足弱車の、力なき花見なりけり」〔熊野〕による。

◆中道寺の町の口 中道寺は京都府北桑田郡京北町上中小字制礼にある寺。真言宗大覚寺派。南光山と号す。本尊は十一面観音像。

◆老若男女貴賤都鄙いろめく花衣、袖をつらねて 「老若男女貴賤都鄙、色めく花衣、袖を連らねて行く」〔熊野〕による。

◆名にあふ 有名な。名高い。「名に負ふ春の気色かな」〔熊野〕。

◆あひ方 特定の客の相手に選ばれた遊女。「あひかたの女郎、かなしひかほをして、めそゝなひて居るを」〔咄本・腮の掛金（寛政十一年）〕

◆野郎 野郎歌舞伎の役者。

◆河原おもての芝居 四条河原の芝居。

◆よつてつく ここは、似通うの意。

◆そもじ 「そなた」の文字ことば。対称。本来女性語であるが、のちには、男性が女性をさして用いることもある。「身づからは青柳の糸、そもじさまは春風にて御入候はんと思ひ置き参らせ候」「御伽草子・をこぜ」「とかく申かねて候へ共、そもじは隠居して給はれ」「咄本・昨日は今日の物語・上」「孫を殺したそもじの胸はりさくやうに有ふのふ」「浄瑠璃・日高川入相花王・三」

◆浴人 湯女のこと。

◆おもひ内にあれば色外にあらはる ことわざ。どんなに隠しても、思っていることは自然と顔色に出してしまうことをいう。「淳千汾曰く、思ひ内に有れば、必ず外に形る」「孟子」が典拠。「げにや思ひ内にあれば、色外に現はる」「熊野」による。

◆国遠 遠国に出奔すること。故郷を離れて行方が知れぬこと。「それより佐太右衛門は国遠（こくえん）して、丹後の宮津に重縁あつて、身を隠しぬ」（西鶴・武道伝来記・三・一）他

◆ないじやくり 「なきじやくり」の転。泣いてしゃくりあげること。激しく泣いて息を吸い込む状態。「泣（ない）じやくりにて手のつかぬ皿」（誹諧草むすび）「お前計が心中だてわしには不心中者といふ名を残さんとやとないじやくりするを」（役者文相撲・江戸）
◆友仲様にあふ事もなみだにむせぶばかりなり 「あふことも無く」と「なみだ」が掛っている。

○卷三之二

二、村雨^{むらふり}がして大夫^{たいふ}をちらし候

【梗概】

父円山から吉野大夫を奪い取った蔵人は、自分の屋敷につれていって、友仲なきあとのこの国をあずかるのは自分であるからと盛んに吉野に言

◆山外に山あつて山つきず 「山外に山有つて山尽きず」（熊野）による。「熊野」の行文は『断腸集之拔書』の詩句によったもの。

◆家中に悪人多して極りなし 「路中に路多うして路窮まりなし」（熊野）のもじり。

◆余念なく 他の事を考えず、一つのことに没頭しているさま。「余念なく見とれぬて」（其磧・都鳥妻恋笛・一・三）

◆いやでもおうでも 不承知でも承知でも。何が何でも。「是からは、いやでもおうでもよひ所へありつけてやらふ程に」（狂言・猿座頭）
「露の情はいやでもをふでも」（大坂独吟集・意楽）「いやでもおうでも了の字に宇冠をきせずハ、ねんもなひ事きくまひといふ」（咄本・秋の夜の友（延宝五年刊））

◆あた 嫌悪の意味のある名詞や形容詞などに冠して、その気持の強いことを表す。『浪花聞書』に「あたへあためんどうあた邪魔などいふ助辞也」とある。「汝にたたらされてあた骨折りつるよ」（小松軍記）
「五十両にたらぬ金、あたがしましういふまいと」（近松・冥途の飛脚・上）「狼藉千万んあた無作法なあた不行義と」（浄瑠璃・仮名手本忠臣蔵・三）

◆人楽み人愁ふ是皆世上の有様なり 「人楽しみ人愁ふ、これ皆世上の有様なり」（熊野）による。ここも「熊野」は『断腸集之拔書』の詩句によったところ。

い寄るが、吉野はなかなか言うことを聞かない。また、家老の飾磨三郎左衛門にも連判状を見せて、自分の側近たることを要求する。三郎左衛門は加古川右近の名があることや、連判状の趣旨が書かれていないことを確認したうえで、血判をし蔵人を安心させる。そのうえで、中国の美女西施の故事を引きながら、女性のために国をほろぼさないようにと忠告し、吉野を自分の屋敷に引き取ることに同意させる。吉野は三郎左衛門の屋敷へ行けば友仲に会わせてもらえると期待していたが、案に相違して、三郎左衛門からすべての原因は吉野にあると決めつけられる。こうなつては若殿のため死んでもらうしかないと言われ、遺書まで書かされたのであった。

【校訂本文】

花前に蝶舞ふ紛々たる雪と、哥舞妓の慰みもきへはて、円山は子に恥とちこもりて対面なく、蔵人はそれにかまはず吉野にのぼり詰て、いやといふを無理にのり物へおしこみ、われも一所にのりしは、花見の車同車にてといひ伝へしに異ならず。蔵人屋敷へいざなひければ、御帰国の悦びとて一家中相つめ、ひとへに国主とてはやせば、飭間三郎左衛門出仕し、

「友仲様御国遠の上は、御前より外この一国を治め給ふ方外に是なし」

と、三方かはらけ千代のことぶき申し上ぐれば、蔵人はくはんと茵になをり、

「三郎左衛門、一国は身がおさむるには知れた事なれども、玉の皿に似せ物を持て上京とは氣遣く、まことの皿はその方外にかくし置しか、友仲方へつかはしたるか。サアくかくさずとも聞たい」

とあれば、

「ハア是は存じもよらぬ仰せで御座りまする。皿ゆへに腰元藤と申す女をころし、その霊のこつて井の内より」

と皆までいはせず

「ふるいく。れきくの名将勇士が無念なる死を遂てさへ、その打たる者にあたはなしがたし。いはんや、こしもと風情の女の一念とはうけとらぬ。コリヤ出なをしめされい。今時はかぶき浄るりの趣向にもあまい事は請とらぬ。右近源左衛門時代の狂言の仕うち、サア皿はどつちへかくせし」と、さのみいかる躰をも見せず、盃扣へて問つむれば、三郎左衛門わきざしぬひて、

「破て仕廻たる皿に御疑かゝれば、申しわけとは是より外はない」

と、腹きらんとするを、藏人おさへて

「ア、はやまるまい。見届たく。皿はかくさぬにきはまつた。まこと春前に雨あつて花のひらくる事はやしといふが、親共が悪心が身が運のひらき時となつた。三郎左その方をうたがはぬといふしるしに、恋こがるゝ吉野をその方にあづくる間、この吉野をおとりにして、友仲をつりよせ討てする思案をめされい。友仲がいきのこりては、一国をとりてもねざめがわるい。親円山殿はうまれ付ての、我まゝものなれば、この相談はきかすべからず。サア別心なきといふ連判状血判」

と差いだせば、三郎左衛門きよつとせしが、披ひて見るに巻頭には加古川右近、

「かればかりはかゝる悪事にくみする者にあらず。扱ははかりことの連判よな」

とうなづき、だんく見れば、三十人ばかり血判をならべたり。しかるに何の文句もなく白紙にて、

「右のをむき相そむかば武運につき、大小の神祇の御罰をかうふるべき」

との留書。さしもの三郎左衛門も不審はれず、

「この白紙の心はいかに」

と問そふなる顔色を見てとり、

「善にもせよ悪にもせよ、身が心にしたがふ心からは、白紙なりとも連判せまい筈がない」

と、のつ引させぬ云ふん。あとへも先へも行光の小わきざしぬひて左の中指をつき、血判名をかき添し筆の命毛おしさゆへに、武道をすてしと人のわらふもいとほこそ、藏人を殿様あしらいにうやまへば、藏人勝にのり光の刀を引ぬきあたへけるうへ、

「其方は一国のたばねをする名家。向後は万事其方へまかする上は、身が一国をおさむるに付て、心づきし事もあらば遠慮なく申しくれられよ」とあれば、三郎左衛門眉をしかめ、

「むかし越の勾踐の寵愛の妃。西施と申すを呉王夫差にあたへて呉国程なく亡びし故、西施は越へかへりしかども、范蠡といふ忠臣呉王の亡びたまひしも色ゆへなれば、我主君越王も是にまどひ給ふてはいかゞと、かの西施を申しうけて立のきしためしをもつて見れば、友仲殿へ心中ぶかき契情あとのこりし段、其意得がたし。其うへ加古川右近物語にて承れば、明石梅軒が悴貫左衛門とはふかき中。その貫左衛門が縄かけてつれ来り、御隠居円山様の、御目にとまる様にあてがひおきし証拠あらはれたる故、貫左衛門が首は御打なされながら、女ばかりたすけ置て何の御せん儀もなく、御てうあいと申すは、ひとへに色に目が見えぬからの義。しかるに御前には是を押取にもらひ給ひては孝行にもはづれ給ふべし。只かへすぐも御ためと申すはこの事。右の女は拙者にくだし給はるべし。幸婦妻なければ范蠡が跡を学び候はん」といへば、蔵人も道理にせまり。さまぐにくだひても帯紐とかぬ美人は、焼物で作た饅頭も同前と、

「いかにも望にまかすべし」

と、呼出してひきわたせば、粹な心から三郎左衛門真実女房にせぬ心を推して、何のしなづなしに頼む命はしら玉のまるいあいさつして、

「今は加様に候へば御いとまを給り候はん」

といへば、蔵人もあざをにぎつて居ながら、四そろをくづされた様なかほつきして、離山きうの秋の月夜に釜ぬひてゆくかと、名残惜めど、三郎左がおためごかしに、ちからなみだを見せぬ盃さしづめ、大夫が「おさへやす」といふたことは花の鶯あふ事も涙をかくしかねにけり。三郎左衛門も御為とは申しながら万事「あ」とはいはず。盃と諸ともに大夫が手を引我屋敷にぞかへりける。

側につめあはせたる侍どもうら山しがり、

「たゝかれて忠になるもあり。主の名代にふるまひに行て忠に成るもあり。主君をたゝいたる弁慶も、あら炭をのんで啞になりたる予譲も、忠といへばひとつくちなれども、結構な刀をもらひ美人の大夫を拝領して、それが忠になるとは」

とさはめけば、蔵人目に姿をたてゝ

「身が心をもしらで、何をぬかすぞ」

としかられ、忠の事は扱おき、鼠のこゑもひそまりぬ。

是はさて置、三郎左衛門は大夫をつれてわがに帰り、家内の者どもを遠のけ一間へともなひ、

「大夫どの、是まではさぞ気がねで有りつらん。追付わか殿友仲様にあはせませふ」

といへば、

「わしも大かたそうであらふと、おまへの所へくるのは外へゆく様になふて、いかふうれしかった」

といへば

「サア若殿様にあはさふほどに、そちらむいて念仏」

といへば、

「わるじやれな事いはずともはやふあはせて下さんせ」

とせけば、

「尤く。様子を申しきかずべし。若殿様には何ゆへの御流浪とおもはつしやるぞ。皆こなたのこのうつくしい顔からおこつた事なれば、首うつて難波へもたせやるべし。契情の首も地女の首も生地^{ちぢ}のよひのを、うつくしうさへ仕立てばかはる事はない物なれども、契情故には家國をもうしなへども、御姫様ゆへに家國を失ふたといふ事は、昔から芝居の仕組にもない事。なぜといふに、地女は地を^{まこと}実でもつてゆくゆへ、是がまことゝはつきりと男をなかつ際限が見へぬに、契情はうそを地にしてたつた一所づゝ是はといふ実を見せて、六尺ゆたかな大丈夫にも、ほろりとなみだをこぼさる事なり。是坂藤が口ぐせのうそのまことゝふるい格なれども、何とやらし給ふべし、穴賢々々とよみあぐるお書とこの手にては、なかぬが世間外の様になりしと、若殿に付てゆきし御近習衆の咄で聞きたり。さすれば首はあはせ申すべし。物いはするといかにこりはてゝ、つゝしんでござる若どのでも、豆腐へ鶏卵をわりこんだ様に成りて、とりわけにくひはしれた事なるべし。こなた契情町では大夫様とうやまはれ、品によつては若殿様のみだい様ともあがめらるゝ人なれども、この三郎左衛門が眼からは大六天の魔王と見ゆる故、昔の西施が故事は蔵人へ申したではない。友仲様への志

布袋和尚も禪寺では本尊のかたわきにたてゝおがめど、水滴にする時はつかへもせぬ肩に穴をあけて、水がみなになると硯石へ打ちあてられ、肩もあたまもくはつちくといはせ、『これ水入れて来い』と関口流に六七間とつてほられ、敷居にあたつてみちんになれば、はき溜へすてられ、本の土には帰れども、布袋めで足ついてのけたといふは、ふむさへあるにあまりなる事と思へど、是信ずると信ぜぬの界にあり。この三郎左衛門生れ付て色事不得手。京の柴崎林左も大かた手まへを形に致して狂言するとうけ給はつた。その眼から見るによつて、生をひては若殿様の迷ひのたね。御立身のさまたげゆへ首を討

といへば、大夫はわつとなき出し、

「皆道理づくめのたとへ事、日中は午の刻、夜中はいつも子の刻と、むかしからさだまつたるあふはわかれの道ながらも、せめて書置はしたゝめさせ、友さまへとゞけて下さんせ」

と、硯ひきよせふたとれば硯に紙もなかりしかば、かきつけしはながみを口にてとりて筆とるを、

「さいこの一通あらためてかゝるべし」

と、料紙箱取り出せば、

「とても世界に神仏はないものか。一度はなぜそはせては下さんせぬ。日親様きこえぬ」

と、正躰さらになかりけり。

三郎左衛門は、もはや夜もふけ、あけゆく窓の山見へて、花を見する心になり、刀の目くぎくいしめし、やがてくびうつ名ごりかなく

◆村雨がして大夫をちらし候 前述のごとく「熊野」に拠った表題であるが、ここは、急に状況が変わって太夫を死なせることになったことをいう。

◆花前に蝶舞ふ紛々たる雪 「花前に蝶舞ふ紛々たる雪」〔熊野〕。

熊野本文は、前出『断腸集之拔書』の詩句が典拠。ここでは前段の歌舞伎の舞台を象徴する表現。

◆のぼり詰て すつかりのぼせ上がつてしまふ。熱中して有頂天になる。「此已前世にうたはれし山本は、この山本にのぼりつめぬか」〔西鶴・難波の貞は伊勢の白粉〕「外のお客は嵐の木の葉でばらばら。のぼりつめてはお客にも女郎にも得手怪我の有物」〔近松・心中天の網島・上〕

◆花見の車同車にて 「花見の車同車にて」〔熊野〕。

- ◆かはらけ 素焼きの杯。酒を飲む器。「ちやんぬりのかはらけ仕出して世にうれども」〔西鶴・世間胸算用・五・二〕
- ◆千代のことぶき 「熊野」に「千代もと祈る」とあるが、これはいうまでもなく『伊勢物語』八十四段の和歌を利用した箇所。
- ◆くはんくんと 「桓桓」ならば、威厳のあるさま。「寛寛」ならば、おうようでゆったりしているさま。「寛緩」(緩やかでおうようなさま)「緩緩」(ゆっくりといそがないさま)等の可能性もあるが、次の蔵人の言葉であることやその話しぶりなどから、「桓桓」と考えておく。「百官押靡け、自然と我を高御座。桓桓と見下して」〔浄瑠璃・摂津国長柄人柱〕
- ◆茵 すわったり寝たりするとき、下に敷く敷物。使用により方形または長方形で、多くは布帛製真綿包みとし、時に藁の筵や毛織物の類を入れ、周囲を額と称して中央とは別の華麗な布帛をめぐるすのを常とした。「秋は春の案じ置きもせず、油簾(ゆたん)一つを茵(しとね)にして」〔浮世草子・好色万金丹・四・四〕
- ◆なをり 定められた場所にきちんとすわる。正座する。「班女はしとやかに座になをり」〔其磧・都鳥妻恋笛・巻五・一〕
- ◆氣遣く ここは「よく気がついた」とほめているところ。
- ◆皿ゆへに腰元藤と申女をころし、その霊のこつて井の内よりと 巻二の一参照。
- ◆あたはなしがたし 「あた(仇)をなす」は恨みに思つて仕返しをする。「きつねと云ものは、あたをなせばあたをなす。恩を見すれば恩をほうずる」〔狂言・釣狐〕
- ◆ふるい 古くさい(言い訳だ)。「爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に。ア、是れ。そりやあんまり。子供もしつた昔咄ふるいふるい」〔浄瑠璃・ひらかな盛衰記・三〕
- ◆女の一念 「女の一念岩をも通す」の略。女の執念ぶかいことのとえ。「イヤ渡さじと女の一念。若(もし)や白簾平家へ渡らば末代まで源氏は埋木」〔浄瑠璃・源平布引瀧・三〕「サア女の一念といふものはこはいものじや」〔咄本・新選躰の宿かえ(文化九年刊)〕
- ◆うけとらぬ 承知できない。納得しない。「『私事、当年三十九に罷成る』といふ。いづれも合点せず『いかにしても、三十九、四十にしては請取がたし』」〔西鶴・日本永代蔵・三・五〕「よくよく理詰の実らしき事にあらざれば合点せぬ世の中、むかし語りにある事に、当世請とらぬ事多し」〔難波土産〕
- ◆あまい なまぬるい。手ぬるい。「あまいやつ、じろりと見た目に

- ほやりと笑ひ」〔近松・平家女護島・三〕
- ◆右近源左衛門時代の狂言 若衆歌舞伎時代から野郎歌舞伎時代にかけてその艶色をうたわれた上方の名女形。月代をかくすため額にかぶる紫帽子の置手拭いを考案した。「かづらすがたや右近なるらん」〔桃青三百韻〕「女がたもむかし右近左近が時は、面影は、まぎらはしく」〔西鶴・男色大鑑〕
- ◆仕うち 舞台でのしぐさ。演技。「精をだすといふは、ねても覚ても、仕内を工夫し、稽古にあくまで精を出して、扱舞台へ出ては、やすらかにすべし」〔役者論語〕「俺が思ふ通りに」〔爺様(ととさん)といひ〕「娘の仕内」〔歌舞伎・韓人漢文手管始〕
- ◆さのみいかる躰をも見せず 前に「蔵人殿は円山殿とは格別の様におもひしに云々」とあった。
- ◆扣へ そばに置いて。控えて。「義賢は猶仁義の勇士はつとばかりに扣(ひか)へある」〔浄瑠璃・源平布引瀧・一〕
- ◆春前に雨あつて花のひらくる事はやし 「春前に雨あつて花の開く事早し」〔熊野〕。ここも前出『断腸集之拔書』の詩句を典拠として利用しているところ。
- ◆連判状 同志の者が自署し、印判ないし血判を押した誓約書。謀反を企てる一味が、意志統一を確認するために作製するもの。「熊川源五兵衛秀景逆意(ぎやくゐ)一味の連判状」〔浄瑠璃・伽羅先代萩・八〕
- ◆血判 起請文、誓詞などに違背しない意を示すため、指を切り血を出して、署名の下におすこと。また、その押したもの。室町中期ごろから武家社会で見られ、戦国時代には盛んに用いられた。江戸時代、新たに役職に任ぜられたときなどに提出した誓詞には必ず行われたが、次第に形式的なものとなった。けつばん。「此方より和睦を破り、血判を反故にして」〔浄瑠璃・鎌倉三代記・二〕
- ◆留書 本来は、手紙の末尾に添える「敬具」「草々」の類をいうが、ここは、文末の断り書き。
- ◆のつ引させぬ のがれられない。「跡は拙者が胸に胸にひらさら一筆あそばせと、床の硯の墨摺り流しのつびきさせぬ入性根」〔近松・双生隅田川〕
- ◆あとへも先へも行光の小わきざしぬひて 「あとへも先へも行かぬ」は、動きがとれなくなり、途方にくれる状態。進退きわまつたさま。「さらばといへども跡へも先へもゆかず、見るに笑しく」〔西鶴・好色一代男・六・六〕。これに、「行光の小わきざし」を掛けた。「行

光」は刀工の名と思われるが未詳。

◆中指 「色道大鏡」に「血判の法は、血を紙におし付くるを忌む。血を出す指、男は左を用ゆ、女は右の中指又は無名指を用ゆ、是二流なり」とある。

◆命毛 筆の穂先の長い毛。書くためにもつとも大切な部分であるところからいう。「雲落（あぶない）物」は筆の命毛（西鶴・本朝桜陰比事）「命」が惜しいに掛けている。

◆殿様あしらい 主君のように奉つて。

◆勝にのり光の刀 「勝に乗る」は、図に乗る。調子に乗る。「おのれはかつにのりつて、そのつれな事をいふか」（狂言・髭櫓）「のり光」は、則光で、実在した備前国の刀工。『貞丈雑記』三に「刀の銘に菊の紋ある事 人王八十四代の天子後鳥羽院の御時に、則光「備前」貞次「備中」……などと云ふ名高き鍛冶のたくみ十二人をえらび、十二月に分ちて院内に番を勤めさせて刀を作らせられ」とあり、『別所長治記』「神吉の城攻」の条にも「重代の打物備前菊一文字則宗二尺九寸ありけるを、右の小脇に引そばめ」とある。

◆むかし越の勾踐の寵愛の妃、西施と申すを呉王夫差にあたへて呉国程なく亡びし故、西施は越へかへりしかども、范蠡といふ忠臣呉王の亡びたまひしも色ゆへなれば、我主君越王も是にまどひ給ふてはいかゞと、かの西施を申しうけて立のきしためし 西施は春秋時代の越の人。天下の美女と称され、越王勾踐（こうせん）の寵妃であったが、会稽山の戦いに敗れたとき、勾踐は彼女を呉王夫差に献じた。その結果、呉王は色におぼれて政を怠り呉の亡びる原因となった。呉王の死後は、范蠡のはからいで、越王のもとにもどらず、范蠡の庇護のもとに余生を送った。

◆其意得がたし 理に合わない。『此九太夫合点がいかぬ』『ヲヲ親父殿そふじゃそふじゃ。此定九郎も其意を得ぬ』（浄瑠璃・仮名手本忠臣蔵・四）

◆其うへ加古川右近物語にて承れば、明石梅軒が倅貫左衛門とはふかき中 吉野が明石貫左衛門と深い仲であったことは巻二の三参照

◆貫左衛門が縄かけてつれ来り、御隠居円山様の、御目にとまる様にあてがひおきし 巻一の三参照

◆証拠あらはれたる故、貫左衛門が首は御打なされながら 巻二の三参照

◆御前 円山のこと。

◆押取 むりに奪い取ること。強奪。「押取にしたる鞍なども、うた

げなるにぞ乗り給ひける」（保元物語・下）

◆婦妻 妻。「此金子才覚致してきたるものには、その褒美として、少知をとる者也共、一人のむすめ龍田を婦妻に得させ、頼政が聲にせん」（其磧・風流宇治頼政・一・二）

◆粹な心から 男の気持ちを敏感に察して。大夫であるから、こういう感覚は発達している。

◆何のしなづなしに 「しなづ」は「品図」で、いいぶん・文句・けち。何も文句を言わずに。「蒲冠者範頼卿、ぬるいお生れ、手柄がなさに義経公にしなづをつけ」（浄瑠璃・義経千本桜）

◆頼む命はしら玉の 「頼む命は白玉の」（熊野）による。ここでは、「頼つてもその命がどうなるかわからず」の意。

◆まるいあいさつして 「まるい」は穏やかなこと。おとなしく挨拶して。「丸う捌いた男作（をとこだて）」（浄瑠璃・夏祭浪花鑑）

◆今は加様に候へば御いとまを給はり候はん 「今はかやうに候へば御暇を賜り東に下り候ふべし」（熊野）

◆あざをにぎつて居ながら 「あざ」には「蠣」の文字をあてる。天正カルタ、めくりカルタなどのハウ（棍棒）の一の札。三皇（あざ、しゃこ、あおこ）の一つで、点数五十点に当る強い札。「あざをにぎる」はここから転じて、果報、利得の種を取り逃がさないように握り持つ。「日比はかるたがすきじやあつたが、ちやうど、ほとけ貝が、あざをにぎつたやうなといはれた」（咄本・軽口ひやう金房（元禄頃刊））「あざをにぎつて押せ押せ、押しこめ乗こめ米俵」（近松・雪女五枚羽子板）

◆四そろ めくりカルタの役の一つ。四枚同じ札がそろふこと。非常に強い役。「ほつこりと・御ざれアザさまヨソロさま」（雑俳・万才烏帽子）

◆離山きうの秋の月夜に釜ぬひてゆくかと 「驪山宮の秋の夜の月」（熊野）の行文に、ことわざ「月夜に釜を抜かれる」（明るい月夜に釜を盗まれる。転じて、はなはだしい油断のたとえ）を掛けた。「其合点はして居ながら、身の一大事をわすれ、いつも月夜に釜をぬかれ、借錢乞と無理の口論」（西鶴織留・一・三）

◆おためごかし 相手の利益をはかるように見せかけて、その実自分の利益をはかること。「必油断なされな」とお為ごかしに云ひ廻せば」（浄瑠璃・祇園女御九重錦）

◆花の鶯あふ事も涙をかくしかねにけり 「老の鶯会ふ事も、涙にむせぶばかりなり」（熊野）

◆たゝかれて忠になる 誰のどんなエピソードをさしているか未詳
◆主の名代にふるまひに行て忠になる 同じく未詳

◆主君をたゝいたる弁慶 謡曲「安宅」や「勧進帳」ものの芝居で有名な話。謡曲「安宅」の梗概は以下のとおり。ニセ山伏となつて逃避行を続ける義経主従十二人は、富樫の守る加賀安宅の関にさしかかり、弁慶は東大寺再建の勧進山伏と弁じたが、富樫は山伏の通行は許さないうといふ。そこで弁慶は即座に往來の巻物を勧進帳と偽つて読みあげ通行しようとするが、笈を背負つて強力に変装した義経が見咎められる。弁慶は色めく一同をおさえて杖で義経を打ち、関守を威圧する。危機を脱した一行が山陰に憩い、現在の不運を嘆いていると、富樫が酒を持参し、非礼を詫びてねぎらう。弁慶は延年の舞を舞い、酒宴に興を添えつつ一同を促し、虎口を脱する思いで奥州へ下る。

◆あら炭をのんで啞になりたる予章 あら炭は堅炭の古い言い方（和訓栞）。予章は「予讓」と書くのがふつう。中国戦国時代（紀元前五世紀）、晉の智伯に仕えて寵愛された予讓は、智伯が趙襄子に殺されるや、名を変えて罪人となつたり、身に漆を塗つて癪の姿になつたり、炭を呑んで啞となつたりして復讐の機会をうかがつたが、成功することなくついに自殺した。

◆ひとつくち 同じもの。同等。「鼠と蝙蝠とは格別のものなるを、一つ口に申さるる事、以ての外のあやまり也」（咄本・軽口もらい多くば）

◆目に菱をたてゝ 眉を上げてにらみつけるさま。「互いに目に角立てゝの詰開き」（浮世草子・新色五巻書・二・四）

◆ぬかす 「言う」のぞんざいな言い方。いいやがる。「『何ぬかすやら』といふ顔。田舎なれば氣もつかず」（浮世草子・新色五巻書・二・一）

◆なふて 「なくて」の音便。「なうて」と書くべきところ。

◆いかふ 形容詞「いかい」の連用形「いかく」の変化した語。たいそう。ひどく。はなはだしく。「廊の女郎を廿六七になれば、いかふ古いものゝやうにいふは簡違ひ」（浮世草子・好色万金丹・五・二）

◆わるじやれな ふざけた。冗談のように。「わるじやれな茶屋ぐるい」（咄本・軽口あられ酒（宝永二年刊）・五）

◆生地 素顔。「わしが鏡で顔を見て木地はずいぶんよけれ共、人がほれぬいな事と思ふたが」（近松・鍵の権三重帷子・上）

◆仕組 演劇、戯曲または小説などの組立て。趣向。「移変わる芝居の噂狂言のうまひ仕組（しぐみ）を末（まこと）に見なし」（西鶴・好

色一代女・四・一）「古風三右衛門ぬれ口舌（くぜつ）などの狂言の仕組（しぐみ）に、相手の役人を我内へ呼びよせ」（耳塵集）

◆際限 「きり」も「きわ」も同じ意味。さかいめ。区切りどころ。

◆坂藤 坂田藤十郎のこと。元禄期（1688～1704）を代表する上方の名優。写実的な芸風で、和事にすぐれ、上方歌舞伎の基礎を築いた。

◆うそのまこと 虚構の中に含まれる真実、というほどの意。藤十郎は写実の芸にその本領を発揮したと評される。「（嵐）三右衛門はうそらしき狂言の仕様にて、しかも名人なり。藤十郎は誠にして、同名人なり」（耳塵集）など。

◆ふるい格 「格」は流儀、やり方。古い手。「今のまんざいの格で、栗うりの柴うりのと丹波から東へ出る老は多し」（近松・大経師昔暦・下）

◆穴賢々々とはよみあぐるお書 「穴賢」はあて字。浄土真宗で御文様（浄土真宗の教養をわかりやすく説いたもの。本願寺第八世蓮如上人の手紙を編集したもの。東本願寺派での言い方で、西本願寺派は「こぶんしょう」という）を誦する時、一節ごとに必ず唱える句。各節の末尾が必ず「あなかしこ」で終わっているため。「これまた、当流にたつところの一念発起、平生業成とまふすも、このころなり。あなかしこく」（蓮如御文章）

◆世間外 常識はずれ。

◆豆腐へ鶏卵をわりこんだ様 区別がつかないことのとえ。

◆大六天の魔王 仏語。第六天である他化自在天（たけじざいてん）には、この天の高所に別に魔王の住所があるとされたところからいう。「第六天の魔王といふ外道は、欲界の六天をわがものと領じて、なかにも此界の衆生の生死をはなるゝ事をおしみ」（平家物語・卷一〇・維盛入水）

◆布袋和尚 中国、後梁の高僧。九世紀から十世紀の人。腹の肥えた身体に、杖を持ち、日用品を全て入れた袋になつて町の中を歩き、吉凶や天候を占つたという。日本では七福神のひとつとして親しまれる。

◆水滴 硯にさす水を入れておくための、金属または陶製の小さな器。机上のすわりが良いので、布袋の像の形に作ることが多かった。「水入れの布袋淋しき昼上り」（雑俳・うしろひも）

◆つかへもせぬ肩に穴をあけて 「肩がつかえる」は肩がこること。肩こりをとるためには、肩をもんだりするほか、小刀で細く切り、鬱血した血を取り出すなどのことも行なわれていたようである。

◆みなになる からになる。「何やきの茶碗にもせよ、五ぶくとのめば、みなになるほどにといふたと」(咄本・当世軽口咄揃(延宝七年刊))

◆関口流 江戸時代に流行した柔術の一流派。徳川家光のころ、関口氏心(うじむね)が林崎甚助から居合の伝を、三浦与次右衛門から組打の法を学び、これに長崎で習得した中国拳法を加えて創始したもので、居合と柔術を組み合わせた新流儀。「いか様関口流を云立、紀州表へ有付た大学といふ者は達人じゃ」(歌舞伎・幼稚子敵討)

◆柴崎林左 柴崎林左衛門。延宝末年若衆方より立役に転じ、宝永末には大坂立役の巻頭の地位をえた。享保七年(一七二二)没。こゝは、晩年「正身の侍風」「実力の随一」と称され、物堅い実直な役を主に演じていた頃を念頭においている。

◆かきつけし 書きなれてい

◆はながみ 畳紙(たとうがみ)。懐紙(ふところがみ)ともいう。

◆あらためてかゝるべし もう一度新しくお書きになるがよい。

◆料紙箱 紙を入れた箱。「造紙箱(或草子箱) 料紙箱の事。古は

料紙箱の事を草子箱など云物也。後には料紙箱といふ也」(貞丈雜記)

◆日親様 室町時代の日蓮宗の僧。中山法華経寺の日蓮に学び、十九才で西海総導師職となったが、再び中山に帰って厳しい修行をつみ、

○卷三之三

○南無あみだぶの武士の娘

【梗概】

三郎左衛門に刃を突きつけられた吉野が、思わず、日頃から信心している法華宗の高僧日親の名を呼んで救いを求めると、その声を聞いて飛び出してきたのは三郎左衛門の母妙蓮であった。その名が示すとおり、彼女は古くからの堅法華で、同じ宗旨のものをこの屋敷で死なせるわけにはいかないと命乞いをされては斬ることもならず、やむなく床下に隠そうとする。と、そこから出てきたのは、ずっとここに置かれていた腰元の藤とその母親妙仙であった。藤と吉野は顔を合やすやいなや、互いに姉・妹の名乗りをあげ、奇遇を喜ぶのであった。藤と吉野は生き別れになった姉妹であり、妙仙は藤の養母だということがわかる。が、これも皆阿弥陀如来の引き合わせと喜ぶ妙仙の言葉を聞くやいな

入浴して辻説法を行う。永享八年(一四三六)本法寺を開き、同一年には「立正治国論」を著わして將軍足利義教を諫めて一時投獄された。このとき舌を切られ焼いた鍋を頭にかぶせられたが動じなかったことから「鍋かむり上人」という。公卿・幕府へ諫争すること八回、他宗と討論すること六十六回に及ぶという。著書に「折伏正義鈔」など。元禄十六年(一七〇三)刊『日親上人徳行記』がある。

◆きこえぬ 理不尽である。あんまりだ。「やあら聞えぬ旦那殿」(近松・曾根崎心中)

◆正躰さらになかりけり 取り乱しているさま。

◆あけゆく窓の山見へて、花を見つる心になり、刀の目くぎくいしめし、やがてくびうつ名ごりかなく、明け行く跡の山見えて、花を見捨つる雁がねの、それは越路われはまた、東に帰る名残かな、東に帰る名残かな」(熊野)による。

◆目くぎくいしめし 刀を抜いたときに、刀身が抜け飛ばぬように目釘をつばきなどでぬらすこと。「目釘をしめす」というのがふつう。

「主従刀の目釘をしめし、手ぐすね引て待かけ居る」(浄瑠璃・仮名手本忠臣蔵・三)

や、吉野は藤と妙仙が浄土宗であることに反発し、三郎左衛門の母妙蓮を加えた四人の間で、凝浄土対堅法華の宗論争いが始まる。うんざりした三郎左衛門が仲裁に入ったところ、彼の刀の柄にある目貫を見た吉野が、それは兄と私に父から形見にともらつたものだと言いだし、三郎左衛門に殺された井戸掘りの男が吉野・藤の兄であることが判明する。兄のかたきとさわぐ二人をなだめかねてみると、三郎左衛門の母妙蓮がその身代わりになるといつて咽笛を突いて自害してしまつた。となると三郎左衛門も黙つておらず、藤を母の敵と追求しはじめる。と、今度は藤の養母に妙仙がそれでは私が死ぬと言つて自害してしまう。茫然としている間に夜はほのぼのとあけていった。

【校訂本文】

南無妙法蓮華經。蓮華經の經の字を教せんと人やおもふらん。三郎左衛門が母は妙蓮とて代々の堅法華なるが、物かげよりこの様子を見てとんで出、「日親様といはるゝからは御宗旨と見へた。いとしやく、祖師日蓮大聖人様の御難日にあたつて、もつたいなや、この母がもらひものがはりに衣を着せて、若殿様にはあはせぬうけあひ」

と、番神様かけて身をなげかけ歎かるれば、三郎左衛門

「折あしゝ。時節もや」

と、

「しからば人にあはせがたし。この下に忍ばせん」

と畳をあぐれば、腰元の藤久ぐゝに養はれ、母もろともにおもやつれ、によつと出て顔見合せ、

「ヤアおまへはあね様か」

「是はくゝいもとか」

といへば、母は、

「ムゝ、かねてそなたの咄めされし、京ノ姉子とはあの人よな。是なる藤ことは、十三歳より養子にいたし、不勝手つゞきて他領へ立のき、藤は去年からこの御屋敷へ奉公に出せしに、ハテあぢな縁で兄弟の対面。是といふもあみだ如来のお引きあはせ」

と涙をながせば、大夫はむつと顔にて

「はおふくろさま、こなさんのお名は何と申しますぞ」

といへば、

「こなたではかるもと名をかへて参つたれども、髪さを切てまことの名は妙仙」

と答ふに、大夫は

「それ見さんせの。忝なくも一部八巻をよむ事はさて置いて、いたゞいても成仏うたがひなき、法華の妙の字つきながら、南無あみだなどは、おとなげない。何事でござんす」

といふに、妹は聞きかね

「是姉様。もつともほんの親たちは法華であつたれども、今の母様のいかいお世話。人となりしも弥陀の功力。妹の縁にひかれ、牛につられて善光寺まいるなされ」

と、堅法華に凝浄土、たゞみを扣いてあらそへば、三郎左衛門が母は大夫が肩もちに出られ、藤が母は涙をながして珠数をくりかけ、回向顔に責念のはりつよきを、三郎左衛門大きにあきれ、

「宗論はゆるく椽の下で心ながにすべし」

と、最前ぬぎすてたる刀をおつとり、指手元に大夫すがつて

「ヤア待て下さんせ」

と、刀の柄をためつつがめつ

「ハテ合点のゆかぬ。わしがおや関路右衛門殿より、兄様とわたしにかたみとてわけてつたへられし、家の紋雪輪に水仙、この目貫は何としておまへの手へは入りましたぞ。何とぞ兄様にめぐりあはん」

と、

「肌身をはなさぬかたしの目貫」

と、守 袋よりとり出して引あはせば、藤が母かいぐしく、それともしらず、

「先日井戸堀の男を三郎左衛門様がおころしなされし時、わらはもそばにくゝりあげられて聞て居たが」

と、皆までいはず

「兄弟の娘」

「ヤア兄様は三郎左衛門様こなたの手に」

といふを、三郎左衛門大小ともになげ出し、

「ア、せくまいぐ。いかにも身が手にかけては殺せしかども、きやつが物まねにて、お家の重宝をかたきへわたさぬ奇代の勲功。いかにも御世治りての後は、その妹を尋ねいだし、かたき討れんためうしなはじと刀にかけし印の目貫のかたし物。さてはそち達が兄なりけるか。何をいふても若殿様を御世に出すまでは。この三郎左衛門が命は自由にならぬとあきらめ、敵討を待てくれよ。目貫に打つてあらはし置かうへ、手ごめにしていか様ともすべきそちたちへ、分ていふ身が偽はいはぬ」

といへども、

「イ、ヤきかぬぐ。兄様さぞ口惜しふござりませふ。食いついてなりともかたきといふしるしを付させ下され」

と、自我偈繰る様に声もしらけ、無量寿品になきくどけば、妹は

「人を打てかたき討をのばせよとは、弥陀の誓にももれし言葉」

と、義理を責めたる六字づめ。詰かけく恨ければ、三郎左衛門が母手をうち、

「さてくけなげなる姉妹。三郎左衛門申すは御主のお為をおもふての事。ふたりの衆の心ばらしに三郎左衛門が名代、是見られよ」

と、床に有りしさがおつ取り、咽ぶゑにつらぬかれてうつぶしに臥給へば、三郎左衛門大におどろき、兄弟の娘もあはてふためき、
「申し、おふくろ様く」

と泣けど叫べど息たへたり。三郎左衛門しばし言葉もなかりけるが、

「しばしの道理をも聞わけず母を殺せし愚智無智の女郎どもめ。八つぎきにしてもあきたらねども、大夫ことは存じいれもあれば、助けをきて、どうで身がかたきうたるゝ心。兄が死ぬる時のかたしの目貫もその方ばかり。しかれば母がかたき討ずには置きがたし。さしあたつて妹の藤、主殺し同前なれども、その段はゆるして手打ぞ」

と飛かゝるを、母親へだてゝ、藤へあたる刀をうけあけになれば、

「なさない。是母様」

と取つく娘をつきのけて、

「申し是、三郎左衛門様。御立腹は御尤。養子と申す事打ちあかし、何とて娘が殺さるゝを養母が見てゐられませふぞ。御隠居様の敵とおぼし召れ、私をいか様にも御心まかせ」

とすりよれば、三郎左衛門も義理にせまり、あはれをふくむぞ道理なる。

妙仙はかねて用意やしたりけん、数珠袋よりさが取り出し、

「どふで殺しはなされまい。なむあみだぶく」

とゑぐるに取りつき、娘の藤ともにすゝむる詞の内、母はくるしみ、陀仏の綱網も切れゆく命の糸。とけてむなしくなりにけり。こなたは老母のなきがらを、敵のための母ながら、とても一蓮法花宗億載阿僧祇泣きつくせば、三郎左衛門天におどり地にはね、題目あこがれて、兄弟自然と中直り、
「実今思ひ出したり。一念弥陀仏妙法華」

と三郎左衛門に養なはれ、若殿の御出世とともにまつばのふたり女、かたきをうつつの山かづら、夜はほのぐとあけにけり

◆南無妙法蓮華經。蓮華經の經の字を教せんと人やおもふらん「南無妙法蓮華經、蓮華經の經の字を、きょうせんと人や思うらん」〔狂言・宗論・冒頭部〕

◆堅法華 法華宗の熱心な信徒。法華宗信者は概して他の宗派に対してはなほだしく排他的であり、片意地で狂信的とされる。「さる町人に情のこはき法花宗と浄土宗と、老軒の家に壁をへだて住みける。ゝかた法花の事なれば、口すさまじくそしること」〔咄本・輕口露がはなし（元禄四年刊）・三〕

◆宗旨 仏教の宗派。江戸時代は宗門改の制度があり、人別帳には必ず宗旨が記載され、生国と宗旨とは当時の人の身上についての基本的条件であり、関心事であった。「なんぼうそちの宗旨の元祖じやと崇めらるる高野大師も」〔其磧・傾城禁短氣・二・一〕「宗旨はなんだの。浄土宗。」〔滑稽本・東海道中膝栗毛・初編〕

◆祖師 一宗一派の開祖をいう語だが、特に日蓮をさしていることが多い。「祖師上人は越後へ御配流（はいりゅう）なされてより二十余年の御經廻」〔秋成・世間猿・二・一二〕

◆日蓮宗 建長五年（一一五三）日蓮によつて開かれた仏教の宗派。仏教の真髄は『法華經』にあり、これによつてのみ人は救いを得られると主張し、厳しく他宗を攻撃し、これを国教とすべきことを説いた。他の宗派や為政者から圧迫を受けたが、日蓮や弟子たちの不屈の布教活動によつて次第に発展し、特に地方武士、都市商人、職人らに多くの信徒を得た。日蓮の死後、遺骨を葬った甲斐身延山久遠寺が中心となった。この宗の信者は、他宗の者に対し、交際することにこだわりのを持ち、情が強いというので、固法華といわれる。「南無妙法蓮華經」の八字のお題目を唱え、団扇太鼓をたたいてお勤めをし、撥題目を懸字などにして尊重する。法華宗。

◆御難日 日蓮宗で、日蓮が文永八年（一二二一）九月十二日に相模国龍の口で首を切られそうになった災難をいう。

◆うけあひ 保証人になること。「与作がかけがよつ程有皆をのれが請合じや」〔近松・丹羽与作・中〕

◆番神 「三十番神」のこと。慈覚大師が『法華經』を書写したとき、日本国内の神明が三十日間毎日当番で守護したという、その三十体の神。のち、縁日の神仏となり、天地守護や内侍所守護など、十種ばかりの三十番神が定められた。「惣じては七千余座の神、殊には三十番

神朝家を守り奉り給ふ」〔保元・上〕「恐ろしや御幣（みてぐら）に三十番神ましまして」〔謡・鉄輪〕「おそろしやみてぐらにといふを、ゆきあたり俄になをし、おそろしや股（またぐら）に、三十番神おはしますと」〔咄本・醒睡笑・七〕

◆おもやつれ 病氣や疲れなどのために顔がやせ衰えること。また、以前よりも顔がやせ衰えて見えること。「父がそろそろ抱き起こすおちが顔の面癩（おもやつ）れ」〔近松・女殺油地獄・中〕

◆こと 人を表す名詞代名詞につく用法。その人をさし示したり、ゝに關して、などの意を添える。「太夫の浮雲事わすれず」〔其磧・傾城禁短氣・四・二〕

◆不勝手 懐ぐあいが悪いさま。貧乏になること。「去る歴々の人、なにとかして近年不勝手になり、色々&思案して」〔咄本・輕口福藏主（正徳六年刊）・一〕

◆あぢな縁 ふしぎな縁。

◆あみだ如来 浄土宗系では、衆生が阿弥陀如来の救いを信じて念仏すると必ず極樂に往生するとされ、もつとも重んじられる。阿弥陀仏。◆むつと顔 機嫌を損じてむつとしてゐる顔つき。「専左衛門むつと顔にて」〔其磧・都鳥妻恋笛・三・三〕

◆こなさん 「こなさま」の転。江戸前期には「こなさま」と同じ用法の女性語であったが、次第に敬意が薄らいだ表現として対等以下の者にも用い、また、男性も使うようになった。「こなさん達の顔見たいと思ふ折ふし呼びに來たを幸に」〔近松・夕霧阿波鳴門・上〕

◆髪さき ここは、髪の手。

◆それ見さんせの それ見なさい。

◆一部八巻 八巻二十八品から成る中国後秦の鳩摩羅什（くまらじふ）訳の妙法蓮華經のこと。中国並びにわが国で最も普及し、両国における仏教史や文化史の展開に与えた影響はきわめて大きい。「法華經の一部の八巻のと言つて、なま長い經を読もうより」〔宗論〕

◆いたぐいても成仏うたがいなき いたぐれば間違ひなく成仏できる。「お經をいたぐいても即身成仏は疑いない」〔宗論〕

◆法華の妙の字つきながら 「妙仙」という名に妙法蓮華經の「妙」の字がついていることをいう。

◆いかいおせわ とてもお世話になった。「いかい」は形容詞「いかし」の連体形として用いられるもので、善悪いずれにせよ、程度のは

なはだしきさまをいう。「母様（かゝさま） いかいお世話」（近松・鍵の権三重帷子・上）

◆人となりしも 一人前に成長したのも。「石堂丸……母に對（むか）つていへりけるは『わが身母の手一ツして養育（はぐ）ま）れ、かく人となりし事、その恩世の中の親には百倍せり』（馬琴・荳萱後伝玉櫛笥・中）

◆くりき 功力。仏法や經典、その他、もろもろの功德によつて得られる不思議な力。「御法の功力に草木国土も成仏なれば」（謡曲・巴）「ア、念仏の功力有難い。こちも念仏申そ。」（近松・心中天網島・上）

◆牛につられて善光寺まいりなされ ことわざ。「牛に引かれて善光寺参り」。自分の発心からではなくて他に導かれて信心の行為をすること。車にしかれてよい所へまいるとはと、とひましたれば、ハテ牛にひかれて善光寺まいりするわいといはる」（咄本・咲顔福の門（享保十七年刊））

◆凝浄土 浄土宗の信者はその教えに凝り固まることが多いとして、こう呼ばれる。

◆たゝみを叩いて ことばで激しく人を責めるときに手で畳をたたくことをいう。「分別なされ吉次殿と、たゝみをたたいてねだらる」（近松・孕常盤）

◆肩もち 一方の人のひいきをすること。「ヤア替った所へよこ合から出てかた持か。うぬもこれやあいずりか」（歌舞伎・傾城勝尾寺・口明）

◆珠数をくりかけ 数珠を取り出し。

◆回向顔 回向をするような顔つきで。

◆責念仏 はげしく念仏を唱えること。「責念仏の生玉の春」（俳諧・大矢数）「何れもわれいちとしころかゝつてせめ念仏を申し、すでに回向とおぼしき時」（咄本・軽口露がはなし・四）

◆はりつよき 気が強いこと。意地を張り合うこと。「我が心にいらぬ男を振りつけるを、張（はり）が強いといふにはあらず」（其磧・傾城禁短氣・五・二）

◆宗論 仏教の諸宗派間の教義論争。「愚者の宗論」（咄本・軽口機嫌囊（享保十三年刊）・二）

◆心ながに 氣長に。「とかく商（あきない）の道は心長ふ、遊興は短くばつと出て」（其磧・傾城禁短氣・四・二）

◆ゆきわに水仙 雪輪も水仙も家紋には用いられる。

◆かたし目貫 目貫は刀の柄に表・裏一對にして用いるが、その片方だけ残った半端になったもの。「此猿、口のうちより虎のかたし目貫（めぬき）を取り出し」（西鶴織留・二・一）

◆守袋 符を入れて身に着けている袋。生年月日・父母の名などの書き付けや、形見などを入れたりする。「首にかけられし守袋を明んとし給ふを」（其磧・風流宇治頼政・四・三）

◆せくまい あわてるな。かつとするな。「色道大鑑・一」に「せく、男女にかぎらず、恨みあるか、嫉妬の心にてか、立腹して胸へせきあぐる心也」とある。「本望はとげたるぞ必ずせくまい」と、いふも閑路の朝鳥飛び立つ心ぞ道理なる」（近松・姫山姥・一）

◆物まね

◆奇代 非常に珍しい。「天竺震旦はしらず。我朝には奇代のためしなればとて」（南嶺・魁對盃・四・二）

◆じがげ 自我偈『法華經・如來壽量品』にある「自我得仏來」に始る偈頌（げじゆ）。われわれの住む世界がそのまま寂光浄土であることとを説き、最後に仏の大悲の発露を説くもので、『法華經』に説くところの眼目とされる。「法華經の六卷の自我偈にや説かれたる」（梁塵秘抄・四句神歌）「そつちがさう胸をすへれば、おれも又じがけを出して受取ふ」（歌舞伎・名歌徳三舛玉垣）

◆声もしらけ 声も力をうしない。

◆六字づめ 『阿弥陀經』の、阿弥陀仏の名号を七日間一心不乱に唱えれば極樂往生できるという説にもとづき、念仏を百万遍唱えるその終わりに「南無阿弥陀仏」の六字に節をつけて長く唱えること。「死骸を駕籠に打乗せ、連れ節に六字づめの念仏申て帰る道すがら」（其磧・傾城禁短氣・四・四）

◆詰めかけ 詰め寄って問いただす。「八幡堪忍ならずと、眼色かへて詰めかくる」（西鶴・武道伝来記）

◆心ばらしに 気が晴れるように。

◆名代 身代わり。「其の時は名代（みやうだい）に死んでくれもなされまい」（近松・用明天王職人鑑・二）

◆さすが 刺刀。江戸期においては、武士の帶する脇差の鞘の外側に差してある小刀をいう。小づか。「つつと入つてはねたふしさすがをさか手にめつたづき」（近松・寿門松・上）

◆ぐちむち 愚智無智。「愚智」も「無智」もおろかなこと。知恵の浅いこと。また、その者、おろか者。「愚痴無智の野暮達の為詳しく説いて聞かせ申す」（其磧・傾城禁短氣・一・二）

- ◆ 存じいれ 思うところ。考え。「是非同道といひか、つてひかざれば、よろこび兩人のぼりしが、九兵衛存知入の有とて、脇指ひとつになつて」〔西鶴・武家義理物語・二・一二〕
- ◆ どうで いずれにしろ。どっちみち。「どうで女房にや持ちやさんすまい」〔近松・曾根崎心中・道行〕
- ◆ あけになる あけに染む。血だらけになる。「御首もなき尊骸あけに成て伏し給ひ」〔近松・国姓爺合戦・一〕
- ◆ 数珠袋 数珠を入れる袋。数珠のほか、鍵・小銭など小さい手回り品を入れた。「今婦人のもつ小き袋を数珠袋と云、過なり。調度袋と云事なり」〔遠碧軒随筆分類抄・下〕「つぎ々々の珠数袋、此中にさられた時の暇（いとま）の状ありしを、是はとつて捨て」〔西鶴・好色五人女・二・一二〕
- ◆ 弥陀の綱網 阿弥陀仏の救いの糸。「弥陀の御船」等の言い方になつたもの。
- ◆ 一蓮 「一蓮托生」の略。死後、極楽浄土で同じ蓮華の上に生まれること。
- ◆ 億載阿僧祇 「億載」も「阿僧祇」もともに非常に永い年月のこと。未来永劫。
- ◆ 題目あこがれて 題目も忘れてしまい。

- ◆ 一念みだ仏 「一念弥陀仏即滅無量罪」の略。仏語。一たび弥陀仏を念ずればすなわち無量の罪を滅する。一度南無阿弥陀仏と唱えらると、数限りのない罪もたちまちに消えうせてしまう。源信の『万法甚深最頂仏心法要』に「往生本縁経云」として見え、中世以降、広く読誦された文句。「それ一念弥陀仏即滅無量罪。即ち廻向発願心。心を残すことなかれ」〔謡・実盛〕
- ◆ 妙法華 妙法蓮花経の略。
- ◆ まつばのふたり女 松葉の「松」に「待つ」を掛けた。
- ◆ かたきをうつ山の山かづら、夜はほのぐとあけにけり やまかづらは「日蔭蔓（ひかげのかづら）」の異名であり、また、山野に自生する蔓性の植物全般にもいう。「うつの山」は、『伊勢物語』第九段（「行きくゝて、駿河の国にいたりぬ。宇津の山にいたりて、わが入らむとする道は、いと暗う細きに、つたかえでは茂り、物心ぼそく、すゞろなるめを見ることと思ふに、修行者あひたり」）。敵を討つ↓宇津の山↓山かづらと続き、さらに、「やまかづら」は和歌では、暁に山の端にかかる雲、さらにそこから転じて暁・早朝の意にも用いられる（「あらたまのとしの明行く山かつら霞をかけて春はきにけり」〔続千載・春上〕）ところから、「夜はほのぐとあけにけり」につながる。

会員の所属一覧

木越 治	金沢大学文学部
高島 要	石川工業高等専門学校
高橋明彦	金沢美術工芸大学
村戸弥生	韓国霊山大学
木越秀子	北陸古典研究会会員
穴倉玉日	金沢大学大学院社会環境科学研究科